様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０４４０

研究課題名（和文）複文構造の認知・機能的研究：階層性とインターフェイス

研究課題名（英文）A cognitive-functional study of complex constructions: the layered structure and interface

研究代表者
大堀　壽夫（Ohori, Toshio）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：２０１７６９９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：2017年度においては、主に二つの研究に注力した。第一に、これまでの研究成果をより一般理論的な観点から検討し、複文構文の考察を歴史的変化にも適用し、複文の文法化プロセスについて機能言語学の枠組みに基づいたモテデル化を試みた。8月にはRole and Reference Grammarの国際会議を東京大学駒場キャンパスにて開催した。第二に、今後のさらなる展開を視野に、認知・機能言語学の基本的課題について考察を行った。特にメンタル・コーパスの発想を取り入れつつ、認知言語学が対象とする文法知識とはいかなるものかについて考察を行った。

研究成果の概要（英文）：In the year 2017, the research focused on mainly two issues. First, previous research results were cast into a general theoretical framework and attempts were made to draw general implications out of it. Special attention was paid to the grammaticalization of complex constructions. In August, the International Conference on Role and Reference Grammar was held in conjunction with the present research project. Second, the foundations of cognitive-functional linguistics was examined with a view to future research. The implications of the idea of mental corpus were examined in order to shed new light on the nature of grammatical knowledge under the cognitive perspective.

研究分野：認知言語学（意味論、機能的類型論、談話分析）

キーワード：認知言語学　機能言語学　言語類型論　複文構文　文法化　意味論

１．研究開始当初の背景

複文構造の研究は、豊かな可能性を見せつつも、開拓の余地の多い領域である。特に、統語構造と情報構造、および談話の相互行為との関連は、近年多くの注目を集めている。その中で、本研究は特に２つの理論的課題を出発点としている。

(i) 近年、中断節構文（「言いさし文」）は世界各地の言語で観察されることが報告されている。その類型はいかなるものか。日本語における該当構文の特徴はいかなるものか。

(ii) 複文構造を始めとする構文の談話機能は多様であるが、それはどのような枠組みで捉えればよいか。コーパス言語学等の最近の成果をどのように組み込むべきか。

２．研究の目的

本研究は、上記(i)については、中断節構文の類型と談話機能について、これまでの研究の上に立ち、さらなる知見を積み重ねることを目指す。同時に、文法化の観点から、中断節構文およびその他の複文構造について、変化のプロセスを体系的に捉えることも目標とする。上記(ii)については、意味論・語用論・談話分析・コーパス言語学からの知見を摂取し、具体的事実に基づいて、複文構造の談話機能を捉えるための方法論を開発する。

加えて、世界各地の研究者たちと連携をはかり、本研究の目的に向けて意見交換をはかる。

３．研究の方法

これまでの研究で蓄積した会話コーパスをもとに、中断節構文の例をリスト化し、分類を行う。アンケート調査等を利用して、構文のタイプ分けについての資料を集める。同時に、中断節構文を「省略」として見ることの妥当性についても、アンケート調査を利用しつつ考察を行う。

談話内での構文の機能を明らかにするために、コーパスへのタグ付けを行う。文脈を読み込んだ上での作業となるため、手作業によることになるが、将来的には PC 支援によるより客観的で高速の処理ができるよう、作業の明示化を行う。

理論的側面については、文献調査、研究会、ワークショップ等を通じて考察を深め、意見の交換をはかる。

４．研究成果

本プロジェクトの成果は、次の３点にまとめられる。

(i) 中断節と類似構文について

日本語の中断節構文について、最近報告されている他の言語との比較を通じて、その特性を考察した。また、日本語の個別的特性についても考察した。国内では日本語用論学界のワークショップ「『中断節』の語用論と類型論：自然発話・インターネット・メディアでの使用例を対象に」において、指定討論者をつとめた［I-2、II-10］。このワークショップでは、中断節と大堀が呼ぶ現象と、Evans たちが非従属化と呼ぶ現象との相違について言及した。具体的には、日本語におけるテ形による節連鎖やシ形による接続は従属節と呼ぶことはできず、これらの形態の自立的（言いさし）用法は別のカテゴリーとして扱う必要がある。本来節を連結するための文法形態が、会話の場においてターンの切り替えとともに話者のポジションを提示するために使われるケースは、「相互行為の資源」としての文法という見方を裏付けるものであることも指摘した。加えて、形の面から見ると、接続形式を伴った節の自立用法としてくくることができるが、補文節由来のもの、副詞節由来もの、それ以外のもの、というように分けて見ると、補文節由来のものは隣接ペアによる共同構築が多く、副詞節由来のものは談話のマテリアルの再利用も含め、より広いスパンで相互行為に関わっていることを指摘した。

中断節とは異なる複文構造の変化の一つとして、本来補文をとる主節が補文をともなうことなく使われる、脱補文化とも呼ぶべき現象がある。英語における I think, I mean, you know などの、一種の談話標識としての用法はこれまでも指摘されてきた。これらと部分に類似した性質をもつのが、that's why という句である。本来ならば why の後に節が続いて理由の関係を表すのだが、口語英語では独立用法がしばしば見られる。談話の構成という観点から見ると、that's why は先行する談話内で話し手がすでに述べたことを繰り返し、要点を確認するために使われる。話し手のターン数や発話量は that's why を発する前後で目立った相違がある。認知意味論では、「理由」という関係を、実質的、認識的、発話行為的という３レベルで捉えてきたが、これに談話の一種メタ的なレベル、すなわちある話題を取り上げることの妥当性の確認を加える必要がある。［II-12］構文理論の観点からすると、that's why の機能を一種の文脈操作子と考えて、この構文のもつ情報に加えることができる。［II-12］の発表を行った学会の成果報告と、構文研究についての動向については［II-11］で発表した。

(ii) 文法化と言語進化について

これまでの文法化研究では、複文構造の起源について多くの議論がなされてきた。本プロジェクトでは、中断節構文についての知見から、いったん成立した複文構造が解体し、自立用法を比較的短期間で（すなわち、複文構造の文法化のプロセスと変わらぬスパンで）もつようになることの意味合いを考察した。［II-8］複文構造の「行く末」としては、中断節（従属部の自立化）、脱補文化（主節の単独用法）、および「だから」のような述部＋接続形態のイディオム化による独立接

続詞の成立が見られることを示した。文法化を標準的な定義に従って、実質的な意味をもった自立形式から文法的な機能をもった拘束形式への変化と考えるならば、複文構造がたどる上記三通りの変化は文法化には入らない。それらは構文化であり、第三のケースは構文化を経たイディオム化と見ることになる。しかし、文法の定義を談話構成の手段となる形式のレパートリーまで含めることも可能であり、複文構造の「行く末」を考えることは、文法化と構文化の境界を考える上で、重要な意義を持つ。

文法化についてのこれまでの多くの議論は、生成文法のアプローチによる一部の研究を除いて、文法構造の表示について具体的なモデルを想定していなかった。しかし、認知・機能言語学においても、明示的なモデルを採用することで、これまでの知見の体系化とさらなる進歩が可能になる。[II-1]、[II-7]においては、RRG の枠組みに基づいて、連動詞構文が接置詞的用法を持つにいたるプロセス、複合述語が助動詞適法用を持つにいたるプロセス、および中断節の発達プロセスを分析した。RRG は句構造、語彙構造、操作子、および情報構造を同時に表示する並列表示型の理論であり、この枠組みを採用することで、要素の（非明示的なものも含んだ）移動を想定することなく、変化の中間段階を適切に捉えることができることを示した。連動詞構文の本来の意味的スキーマが文法化に課す制約は、語彙構造からの投射が句構造の構造変化後も残るケースである。また、中断節については、内核レイヤーの連接が元となって起きるケースと、節レイヤーの連接が元となって起きるケースを異なる構造表示によって捉えた。この区分は、アンケート調査による「省略」部分の復元についてのレスポンスの異なりによっても支持される。

複文構造が経る変化についての議論はまた、近年論じられることの多い言語の起源と進化の問題とも結びつく。これについては、[II-5] を始めとして海外の研究機関で講演を行い、活発な議論を交わした。文法におけるいわゆる再帰構造の一つの表れとして、従属構造が挙げられるが、この構造は、例えば代名詞などと比べると、歴史的な安定性の比較的低いものであり、従属節の成立・自立化どちらをとっても数世紀で交代する例がしばしば見られる。この点で、再帰構造を人間言語固有の特徴と見なすにしても、異なる種類の証拠と論理構成が求められる。

言語の起源と進化については、文法構造の類像性という観点から考察を行った。[III-5] そこでの主張の一つは、類像は「原始的」なものとは必ずしも言えず、概念と言語形式（主として音声）それぞれにおいて構造を見出し、かつ二系統の構造の間に体系的な対応関係を認識する能力、すなわち図形的類像性は、きわめて高度なアナロジー能力を基盤するものであり、形と意味を双方向的に類推する能力が人間言語の発達の一つの重要な局面ではないかということである。複文における形式上の並列性・等価性と概念上の並列性・等価性の対応、同じく形式・概念両面における非対称性や近接性を例として論じた。

(iii) 認知・機能言語学の基礎研究

上記の研究と並行して、本プロジェクトのバックボーンである認知・機能言語学の基礎研究および裾野を広げるための活動に従事した。[II-13] はフレーム意味論を利用した語彙の対照研究への取り組み、[I-1] と [III-3] は認知言語学の意味観の人文学的背景を掘り下げて考察したものである。また、[III-2] は認知・機能言語学における使用基盤モデルの発想を極限まで進め、その帰結を考察した著作の共訳である。

これらに加え、「認知言語科学研究会」を立ち上げ、2016-2017 年度において 3 回の研究会を開き、研究の振興につとめた。2017 年には RRG 国際学会を東京大学駒場キャンパスにて開催し、Andrej Malchukov, Mitsuaki Shimojo の両教授を招待講演者として招いた。世界各地から多数の参加者を得て、非常に有意義な研究交流を行うことができた。学会ホームページ：

http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~rrg2017/

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

[I-1] 大堀壽夫. 2017. 文化とパーソナリティ—意味論の拡大に向けて. 『日本エドワード・サピア協会年報』no. 31. 1-14.

[I-2] 大堀壽夫. 2015. 中断節をめぐるワークショップの論文についてのコメント. 『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』. 299-301.

〔学会発表〕（計 13 件）

[II-1] 大堀壽夫. 2017. 文法化における構造変化の表示方法. 第 2 回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ（GJNL-2）H29 年 11 月 18 日. 東北大学.

[II-2] Toshio Ohori. 2017. Insubordination in discourse and its implications to the evolution of language. H29 年 1 月 30 日. Johannes Gutenberg Universität, Mainz.

[II-3] 大堀壽夫. 2016. 文化語彙とその解釈. 日本エドワード・サピア協会第 31 回研究発表会. H28 年 10 月 22 日. 東京大学本郷キャンパス.

[II-4] 大堀壽夫. 2016. 認知言語学の課題：文

化解釈の沃野. 東京言語研究所開設 50 周年記念セミナー. H28 年 9 月 4 日. 国立オリンピック記念青少年総合センター

[II-5] Toshio Ohori. 2016. Insubordination in an evolutionary context: the primacy of cooperation. H28 年 3 月 21 日. Helsinki University, Helsinki.

[II-6] 大堀壽夫. 2015. Commentary: Comparing pragmatic practices across languages. 日本語用論学会第 18 回大会. H27 年 12 月 6 日. 名古屋大学.

[II-7] Toshio Ohori. 2015. On the gradualness of grammaticalization: an exercise in representation. International Conference on Role and Reference Grammar 2015. H27 年 7 月 30 日. University of Düsseldorf.

[II-8] Toshio Ohori. 2015. Destinies of subordination. NINJAL International Symposium on Grammaticalization. H27 年 7 月 4 日. 国立国語研究所.

[II-9] 大堀壽夫. 2015. 話しことばの言語学のこれまでとこれから. 第 10 回話し言葉の言語学企画セッション. H27 年 3 月 16 日. 東京外国語大学.

[II-10] 大堀壽夫. 2014. 日本語用論学会ワークショップ「「中断節」の語用論と類型論：自然発話・インターネット・メディアでの使用例を対象に」. 指定討論者. H26 年 11 月 29 日. 京都ノートルダム女子大学.

[II-11] 大堀壽夫. 2014. 構文研究の動向. 文法学研究会. H26 年 10 月 11 日. 東京大学.

[II-12] Toshio Ohori. 2014. *That's why* construction: 'reason' on the interactional tier. The 8th International Conference on Construction Grammar. H26 年 9 月 4 日. University of Osnabrück.

[II-13] Ganna Gladkova & Toshio Ohori. 2014. Contrastive frame semantics: *sit*, *lie* and *stand* in English, Russian, and Japanese. The 6th International Spring Forum of the Japan English Linguistic Society. H26 年 4 月 20 日. Doshisha Univ.

〔図書〕（計 5 件）

[III-1] 大堀壽夫. 2017. ことばの知識は動的に更新される使用の記憶でできている. ジョン・テイラー『メンタル・コーパス』訳者解題. くろしお出版. 481-486.

[III-2] 西村義樹・平沢慎也・大堀壽夫・長谷川明日香・古賀裕章・小早川暁・友澤宏隆・湯本久美子（訳）. 2017. ジョン・テイラー『メンタル・コーパス』. くろしお出版. （第 6 章「構文」を担当）.

[III-3] 大堀壽夫.2017. 認知言語学の課題：文化解釈の沃野. 西山佑司・杉岡洋子（編）『ことばの科学—東京言語研究所 50 周年セミナー』. 開拓社.

[III-4] 大堀壽夫. 2015. 斎藤純男、田口善久、西村義樹（編）『三省堂新明解言語学辞典』. 三省堂. 項目（RRG、節連結、動詞連続構文、定型性、経済性、類像性）を担当.

[III-5] Toshio Ohori. 2015. Rethinking diagrammatic iconicity from an evolutionary perspective. Masako K. Hiraga, William J. Herlofsky, Kazuko Shinohara and Kimi Akita (eds.) *Iconicity. East Meets West*. Amsterdam: John Benjamins. 259-274.

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
大堀　壽夫　（Ohori, Toshio）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：20176994

(2)研究分担者
なし　（　　）

(3)連携研究者
なし　（　　）

(4)研究協力者
なし　（　　）